『厳嶋御縁記』（架蔵C本）の本文について

―厳島神社蔵本と同系統の一伝本として―

妹尾好信

【キーワード】 厳島縁起、中世物語、本地物御伽草子

はじめに

筆者はここ数年来、厳島神社の由緒由来を語る本地物の中世物語『厳島縁起』の伝本を発掘し、学界に紹介する仕事を継続的に行っている。そして、「広島大学 世界遺産・厳島―内海の歴史と文化プロジェクト研究センター」の研究成果報告書である『厳島研究』誌上において、毎回一伝本を取り上げて全文を翻刻し解題を付すという形で成果を報告してきた。その結果、広島大学図書館蔵『厳島の由来』（第三種本の一伝本）、岩国市中央図書館蔵『厳嶋大明神御縁記』（第一種本と第二種本の中間的な性質の本）、安永三年写『厳嶋大明神御縁記』（架蔵A本、第三種本）、明和九年写『厳嶋大明神前今記』（架蔵B本、第三種本）を新たに『厳島縁起』の現存伝本として本文とともに世に知らしむることができた。とりわけ、流布本系統第三種に属する本を三点追加できたことはC系統本の流布状況を研究する上で貴重な知見であったと考える。

そして、今年三月に刊行された『厳島研究』第十二号では、最近入手した『厳嶋御縁記』と題する伝本を「架蔵C本」として全文の翻刻を掲載した。ただ、紙数の制約などから、解題を付すことができず、凡例の末尾に、

○本書は、通行の『厳島縁起』とは本文がかなり異なる個性的な本である。話の筋自体は変わらないものの、細部には相当な違いがある。文章の調子も近世的な感じがある。最後が推古天皇の宣旨で終わるところも特徴的である。本書の本文上の特色に関しては、改めて別稿で詳しく論述する予定である。

と記して、本伝本が流布本系統に属する本ではないことを断った上で、解説は今後の課題とせざるを得なかった。そこで本稿では、架蔵C本の特色について、やや詳しく論じてみたいと思う。

一　『厳島縁起』諸伝本とその分類

『厳島縁起』は、現時点でおよそ五十点の写本と一点の版本の存在が知られている。それら諸伝本は、本文の性質上大きく二系統に分けられ、そのうちの一系統は現存最古の伝本である梅沢記念館蔵貞和二年写の残欠絵巻（貞和本）と唯一の刊本である明暦二年婦屋仁兵衛刊の絵入り版本（明暦版本）の二本だけで、後は同一系統に属する写本ばかりであるとされてきた。

松本隆信氏[1]は、前者をＡ系統、後者をＢ系統とされ、Ａ系統は貞和本をＡⅠ、明暦版本をＡⅡと称し、Ｂ系統に関しては、赤木文庫蔵本と刈谷市立図書館蔵本をＢⅠ、天理図書館蔵蔵元和八年写本・続群書類従所収本・慶應義塾図書館蔵本・国会図書館蔵明暦三年写本の四本をＢⅡ、白峰寺蔵絵巻をＢⅢと三つに下位分類された。

一方、別に諸本調査をされた中世説話・絵巻ゼミナール[2]は、Ａ・Ｂ両系統とは異なる独自の本文を有する厳島神社蔵本を紹介され、新たに一系統を立てるべきであると主張、

甲類（乙・丙以外の諸本）
乙類（貞和絵巻・刊本）
丙類（厳島神社本）

の三分類を提唱された。また、厳島神社本の他に、宮島町立民俗資料館所蔵の木下家寄託本も丙類に属することを追加されて、三類一七本について詳細な系統分類をされた。

二

その後、白石一美氏[3]によって、「貞和・元和両系混淆本」かと推測される広島大学附属図書館旧教育学部東雲分館所蔵『宮嶋由来記』が紹介され、さらに一系統が立てられることとなった。

これらの研究成果を受けて、松本隆信氏編「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」[4]の「厳島の本地」の項には、次のようなＡ～Ｄ四系統に分ける系統分類がなされた。

Ａ（一）細見実・貞和２年絵巻零本　大一軸
　　梅沢記念館・貞和２年絵巻零本　大一軸
　（二）明暦２年婦屋仁兵衛刊絵入大本三巻（国会）
Ｂ（一）広大図教育学部分館・安政３年写本の明治31年転写本
　　（内題「宮嶋由来記」）大一冊〉
Ｃ（一）慶応・〔室町末〕写本　大一冊
　（二）赤木・〔江戸初〕写本　大一冊
　　刈谷・奈良絵本上欠（題簽「唐土物語」）横二冊
　（三）広大国文・写本上欠　大一軸
　（四）（イ）天理・元和八年写本　大一冊
　　（ロ）《続類従神祇》
　　（ハ）慶応・写本　大一冊
　　国会・明暦３年写本　特大一冊
　（ニ）多和・写本　大一冊
　（ホ）松本隆信・写本　大一冊
（五）白峰寺・〔江戸初〕絵巻　大三軸

D厳島神社・写本　一冊
※防州河村家・〔文化年間〕写本　一冊

このように松本氏は、流布本的位置にあるC系統本を五類に下位分類し、そのうち第四類を（イ）～（ホ）に細分類された。それに対して山手賢太郎氏[5]は、同系統諸本の本文を精査された結果、薗部幹生氏の二分類説を修正する形で、次のような三種に分類すべきことを提唱された。

○第一種本
白峰寺本（白峰寺蔵江戸初期絵巻）
刈谷本（刈谷図書館蔵奈良絵本）
資料館絵巻（宮島歴史民俗資料館蔵絵巻）
広大巻子本（広島大学蔵巻子本）
続類従本（『続群書類従』第七十三神祇部所収本）

○第二種本
慶大室町本（慶応大学図書館蔵古写本）
慶大江戸本（慶応大学図書館蔵江戸期写本）
国会本（国会図書館蔵明暦三年写本）
稲賀本（稲賀敬二氏蔵写本）
旅葵本（旅葵文庫蔵写本）
安永本（石川透氏蔵安永二年写本）
多和本（多和文庫蔵写本）
石川本（石川透氏蔵写本）
神社本朱注（厳島神社蔵写本の本文朱注からの復元本文）

○第三種本
天理本（天理図書館蔵元和八年写本）
松本本（松本隆信氏旧蔵写本）
徳江本（徳江元正氏蔵写本）

分類の基準となる十八箇所の本文異同を丹念に比較検討して一覧表に示した山手氏の分類は明解で、C系統本が大きく三種に分類できることは確かであろうと思われる。さらに細かく検討すれば、松本氏のような細分類も可能かとは思うが、概ね流布本系統は三種に分かれると見てよいであろう。新たな伝本を位置付ける場合は、まずA～Dのいずれに属するかを判断し、流布本的位置にあるC系統本である場合は、第一種本・第二種本・第三種本のいずれに近い本文であるかを見極める必要があろうと思う。

二　『厳嶋御縁記』（架蔵C本）の内容

さて、架蔵C本の本文であるが、先述の通り、流布本系統の本文とはかなり異なっている。以下、物語の展開に即して詳しくその内容を検討していく。

本書の冒頭は、

抑厳嶋大明神と申奉は、人皇三十四代すいこ天皇の御宇、端正五年きのへ申の九月、日本へせんとまします。[6]（1オ）

と始まる。「九月」の部分が、『続群書類従』本（以下、類従本と

称す）など通行本の多くは「十二月十三日」とある。

物語は、天竺東城国の帝王東善大王には千人の后がいたが、いまだ後継者となるべき子がないことが悩みの種であったということから始まる。

ひとへに神明佛たのかごをかうむらんと思召、諸神しよ佛へ御きせいあり。然るに、千人の内、雲のうてなといへる后御くわいたゐなし玉ふ。月日かさなり、たやすく御安さん、王子御誕生あそばしける。王子の御名雲井の王と申けり。（2オ）

とあって、本書では、善才王（本書では一貫して「善才王」と表記する）の母の実名を「雲のうてな」と明記し、善才王の幼名を「雲井の王」と記しているところが特異である。類従本では、

佛神にいのり給ひけるに。一人のきさき御くはひ人ならせ給ふ。日数つもりて御たんじやう有。王子にておはします。[7]（552頁上）

とあるのみである。

次に、善才王は、類従本では、「すでに七才にて御くらひに付給ふ」（552頁上）とあるが、本書には「すてに七ッの御としかむりをちやくし玉ふ」（2オ）とあって、七歳で元服したことを言う。2行後に、「十五歳にて御在位ます」（2ウ）とあって、即位は十五歳の時とする。この時、「雲井の王」から「善才王」へと名を変えたという。類従本では七歳の即位時に「ぜんざい王」の名を得ている。

本書では善才王に百人の后を備えられたのは十五歳の即位時で、この後、王家相伝の三本の扇を見ることになる。本書の本文は、

四

然るに此たいりに十二代つたはる御宝ものにあふき三本あり。壱本はせかいのゑすをうつし、いながら大せんせかいをめのまへにみる如し。いつほん金ていほつけ經をうつし、一本は天下無双のひしよを書なり。（2ウ）

とある。すなわち、扇は十二代伝わる宝物であり、それぞれ、「世界の絵図」「金泥法華経」「天下無双の美女」が描かれていたという。ここが、類従本には、

また此君（宮カ）に八十代つたはりたる御たからあり。一ッにはあふぎなり。四十二のほねにくじらのひげをみがきてほねとし。しろがねをのべて地紙にしたるあふぎ。三ッの絵社かきたりけり。一ッには。いながらさんぜん大せん世かひをまなこのまへにつくし。一ッには。てんか大一のみめよき女ばうをかきつくしたる。（552頁上）

とある。扇には三つの絵があると言いながら二つしか記さないなど本文に乱れがある。白峰寺本では、「八十二代つたはりたる、御たからに、あふぎ三本あり」「一ほんには、水のゑを、か、れたり、一ほんには、ゐながら、三千大せんせかいを、まのこのまへにつくし、一ほんには、てんか第一のみめよき女はうを、かきうつされたり」[8]とあり、三本の扇にはそれぞれ「水の絵」「世界の絵図」「天下第一の美女」が書かれていたという。「水の絵」などではなく、「金泥の法華経」であるところに、本書の仏教を重視する姿勢が表れているように思える。なお、山手氏によれば、扇の材質などの造作を

記さないのは、流布本系統では第二種本の特色とされる。

扇の絵の美女を見た善才王はたちまち恋の病にかかり、臣下たちを心配させる。本書の本文では、

公卿・天上人あつまり、くわけんを初様〳〵慰め奉り、くわんけんも過けれは色〳〵御口号、臣下・大臣此説を大王へちくいニゑひ聞に達し、「若君の御悩は正しく恋煩ひと相見へ、御宝物の扇子の美女のゑすかたを御覧して御能となりし」と申上けれは、（3オ）

とあって、臣下たちが管絃を催して善才王を慰めたところ、王はいろいろ口ずさんだので、恋の病と確信した、それも扇の絵の美女を見て恋い焦がれているのだと察して父大王に注進するのだが、どういう口ずさみであったのか判然としない。類従本では、臣下が大王に「こよひくはんがくありつるに。山ほととぎす雲井はるかに二声三声音づれて候へければ。御くちずさみありけるを。まさしくこひの御やまひとおぼへ候」（552頁下～553頁上）と言っていて、ややわかりやすい。恋の病の対象は、臣下がその後善才王から直接聞き出している。本書でははしょり過ぎた記述になっている。臣下の質問がないのも、流布本系第二種本の特色とされる。

ところで、扇絵の美女に関して、「毘沙門天の妹」とあるべきところを、本書は「美老門御妹吉祥天女といふ美女」（3ウ）と記している。

扇と並ぶ宝物である五烏について、本書は「此帝に二十一代傳はる五烏といふ御宝物あり」（4オ）とする。類従本は「また十二代つたはりたる御たから有」（553頁下）、白峰寺本は「又、みかとに、八十二代つたはりたる、たから有」（455頁）とあり、諸本一定しない。

本書では、五烏が西城国への使いを承諾した時、

若君聞し召てより御悩も少しこゝろよく、時しも卯月初かた、時鳥雲井はるかに音つれけれは、一首の御うたよみ給ふ。

《五月や音信て來る時鳥こひするまろに聲な聞せん》と詠し給ふ。（4ウ）

と、善才王がホトトギスの声を聞いて詠歌する。この歌は、類従本では、五烏が使いを躊躇したのを嘆いて詠んだ歌になっており、白峰寺本ではこの場面になく、先述の管絃の後に口ずさんだ歌になっている。諸本揺れがある場面である。

善才王の手紙を携えて西城国へ旅立った五烏が海上で羽を休めたのは、海から浮かび上がった竜の背の上であった。

龍神かん應ましまして、年經龍神うかひ出、一ッの嶋となり、五烏は是に暫らく羽を休め息をやすめ、龍の背のこけをねぶり食として、汐をのんてのんとをうるほし、立あかり飛行程に、八十五日を經て西条国の玉宮へ着にけり。（6オ）

とある。山手氏によれば、ここが竜になっているのは流布本系第二種本の特色で、他本は齢を経た亀になっている。

西城国の王宮についた五烏は足引の宮が住む御殿の桜の木に留まって休息する。そこで「浪の花」という女房に見つけられて足引

の宮に手紙を渡す機会を得る。この女房名は、通常「なみかつ」（類従本）・「なみかず」（白峰寺本）などと書かれている。足引の宮の返歌を得た五烏は、「九十日」で東城国へ戻る。ここは、類従本では「百七十日」、白峰寺本では「百七十九日」となっている。

通常本において足引の宮の返歌を得てますます恋心が募った善才王が見る氏神の夢告は、本書にはない。千人の大工により御座船を作る提案をしたのは、臣下・大臣の評定の結果とする。山手氏の説では、氏神の夢告の記事がないのも流布本系第二種本の特色である。

そして、新造した千艘の船、千輌の車の中から、「かろき車一りん。かろき船一さうゑらみ出し」（類従本・556頁上）、船には公卿・臣下を乗せ、車には善才王が乗って西城国に向かうのだが、本書には軽い車・軽い船を選び出す記述がない。これも山手氏によれば第二種本の特色である。

途中、海が荒れて難渋した時には、善才王は竜神に祈誓する。本書には次のようにある。

せんかたなく思召、海のおもへ打向ひて、「いかに龍神聞召。我は東条国のあるしなり。少の望ありて、西条国へ渡海するなり。波風静め玉へ」と御祈誓あり。法華經御讀誦、弥陀の名号数千篇唱へ玉へは、風波しつめて御船をこき出す、一ト度ならす。（9オ）

ここで、「法華經御讀誦、弥陀の名号数千篇唱へ玉へは」とある記述は他系統本にはない。ここにも仏教重視、とりわけ法華経を重要視する姿勢が見て取れよう。

さて、善才王が西城国に着いた頃、天一王は昼寝の夢に若い貴公子が悄然として宮中にたたずむ姿を見、続いて召し使う賤女が神がかりして、善才王到着の由を告げたので、王は準備を整えて善才王を迎え入れ、神楽や管絃でもてなす。善才王は足引の宮に逢瀬を求めるが、宮は神仏の立願ゆえ三年は無理と答える。しかし、父王の勧めにより二人は契りを交わすことになる。

通常本では三年（白峰寺本三年、類従本三年三月）、本書では二年半が過ぎた頃、東城国から供奉してきた臣下たちが善才王に帰国を促す。善才王は足引の宮と離れがたいので帰国したくないと言う。すると、通常本では、ここで五烏が善才王に謀を持ちかける。類従本の本文を引く。

五からすまいりて申やう。いかにや我が君。十膳（善）の王にてましますか。御たばかりあつて姫宮をすかしまひらせ給へかしと申ければ。それはいかにとゝはせ給へば。君くわんぎよあらば。さだめてたびの御いのりみかぐらとて。ないし所御しんらくあるべし。そのまぎれに。我この国へのりしくるまのたくみおもしろきよし御物がたり申べし。そのとき姫みやの御手にてをとりくみて車にめしたまはば。くぎやうしんかも船にしのび出てのり玉ふべし。五からす中へまいるべしと申せば。そのときし（儀カ）かるべしとて。（557頁上～下）

送別の神楽の会に紛れて、車を見せるからと騙して足引の宮を誘い出し、そのまま船に乗せて連れ帰ろうというのである。善才王は一も二もなくその企みに乗る。ところが本書では、大きく異なる。

両国の臣下申合せ天一天王の御感嘆をうかひ申上けれは、岩木にあらさる親こゝろ、「なんし等能にはかるへし」となり。姫君に「かく」と申せは、今更あはれみの父上のかなしみ、母をふり捨、はるかの国へおもむく事、名残盡せぬ御涙、父の仰とすゝめられ、用意をかこそはなかりけれ。御嫁入の仕立も有へけれとも、事急なれはあり合せ何のかのとて賑はしき御仕立、善才王は天一天皇と御母后へ御對面にて、姫君は御父母、其外御兄弟中へ御暇乞、両国の臣下・大臣・官女達それ〳〵に御暇こひ相すみ、御乗船有。（11ウ～12オ）

とあって、天一王の承諾を得て、急なこととは言いながらも嫁入りの準備が整えられ、善才王は足引の宮の両親と対面して挨拶し、宮も両親や臣下の人々に別れの挨拶をすませて船に乗っている。極めて円満に事が運んでいるのである。したがって、騙されたことを知った足引の宮の悲嘆や、東城国に着いた時の故郷の父母を思って嘆き悲しむ様子は本書には描かれない。

さて、善才王の帰国を待ち迎えた父東善王は、千人の后たちに日々五十人ずつ足引の宮のもとに参上して慰めるように言いつける。この箇所、類従本では「千人のきさきだち。ひことかゞさず五十人づゝ行給て。なぐさめ給ふべしとあれば」（558頁上）とあって、東善王は自分の千人の后たちに命じたと読めるが、本書では、

「善才王帰国の用意、千人の后をは備へ、万事おこたらす、五十人宛姫宮のもとへ参り慰め申せ」との命を蒙り、日に〳〵留ル〳〵相勤けり。（12ウ）

とあって、あたかも帰国する善才王のために新たに千人の后を選任したかのような記述になっている。后たちが足引の宮の美貌を見て、激しい嫉妬と恨みの気持ちを起こすのは、善才王の后ゆえだとすればより納得がいくが、後の記事から見てどうやらそうではないようだ。やや曖昧な書き方と言わざるを得ない。

后たちは足引の宮を亡き者にしようとたくらみ、人形を作って呪詛するが効き目がないという展開は、本書も通常本と同じである。ただし、通常本では、ここに善才王の母が后たちの呪詛を諫める記事がある。

その中にぜんざい王の御母きさきのたまひけるは。われらがみめのわるき事はぜんせのつみふかきゆへなりとのたまひけれども。よのきさきだちだうしんにすゝめければ。ちからおよばずしてぞおはします。（類従本・558頁下）

後述するように、本書では、千人の后たちの中にあって善才王の母は、殺された足引の宮の首を貰い受けて築山に埋めて供養し、王子の求めに応じて足引の宮の首を掘り出して渡したりしている。この場面に登場しないのはやや不審なところである。ことによると、これは千人の后を善才王帰国にあたって集められたことに設定しよ

うとしたためであるかも知れない。その方が、足引の宮の美貌に嫉妬し、危機感を抱く必然性が大きくなるからである。

さて、ここである后が、千人一斉に仮病を使うことを提案する。本書の記事を引く。

ある后宣ふは、「千人の后一度に虚痛（病カ）をたくみて、いかゝ有へきや」といふ。「此儀然（しかる）へし」と。扨はかせの方へ使を立、后達たくみかよふに、君御占（うらない）かたの御沙汰あらは、足引宮の事あしきやうに取計頼のみ入と千人の后より小袖千重ね、金千両はかせにとらせけり。（13ウ～14オ）

ここで后たちが買収する「はかせ」に関して、類従本は、「まかだ国はうなひ国のさかへに。ゆくすへ五十年にすぎし事をかゞみにかけて見るやうなるさう人」（558頁下～559頁上）と説明している。白峰寺本も同様である。本書にはこの博士がすぐれた予知能力の持ち主であったとは記さず、「朝恩を戴（たい）くはかせも、后達の頼（たのみ）により小袖（そで）と金にほたされ、占やうさん〳〵に申けれは」（15オ）と御用占い師であることを強調するだけである。

なお、通常本では、后たちがこの相人を呼んで占わせるよう東善王に申し入れる記事があるが、本書にはない。

博士は、「是より北に当りて北条国の馬嶺山（はれいさん）といへる山」にある「玉草（くさ）といへる薬草」を善才王が自身で採ってくれば后たちの病は快癒すると占う（14ウ）。この箇所、類従本に、

御くすりは是より北に国有。その国の名をばぎまん国とぞ申なり。おにのすむ所なり。かたみち六年に行所なり。かの国に山あり。山の名をばちやうざんと申。此山にあるやくそうと申草こそ薬なり。（559頁上～下）

とある（白峰寺本も同様）ように、通常本は「きまん国（鬼満国）」の「ちやうざん」という山になっている。本書には作中の地名に独自異文が目立つが、ここもその一つである。

ところで、その山は類従本のごとく通常本では片道六年、往復十二年の距離にあるとなっている。しかし、本書では、「片道（かたみち）三年往來（おふらい）六年」（15ウ）となっており、通常本の半分である。これは一貫していて、そのため善才王が帰国して王子とまみえるのは王子六歳の時となっている。出立に際して別れを惜しむ足引の宮の詠歌にも「待とてもかひはあらしな六ッとせの立なん後や君をみるへし」（16ウ～17オ）とあって、他本とは歌句が異なっている。

本書では、善才王が北条国へ向けて旅立った後、東善王が千人の后たちに重ねて足引の宮を慰めるよう指示している。

御父大王かさねて后たちへ仰出さるゝには、「此度足引の宮の儀、父母にわかれ古郷（こきよう）をふりすて、頼みし善才王他国へ出行るすなれは、淋しき事限り無シ。慰（なぐさ）め参すへし」と仰られけれは、后達は君の御留守（るす）に姫君の御命失はんと工し事なれは、さのみかしつき玉ひ不申。（17オ～17ウ）

こういう記述は通常本にはなく、本書では東善王は心優しいが状況を察知できないやや愚鈍な王として描かれているように見える。

善才王留守中の足引の宮の生活ぶりについても、本書は具体的に詳しく記す。これも通常本にはない。

扨、姫君は御身持かたく御留守を守らせ玉ひ、昼は哥の道を学ひ、夜は法花經を御讀誦、女人成佛の三部經ならびに光明真言・弥陀の名号夜もすから怠らせ玉はねは、御身より光明かゝやくなり。善才王不変の御祈祷おこたらす。（17ウ～18オ）

ここでも夜々法華経を読誦する様子が描かれていることに注意したい。

さて、千人の后たちは、善才王の留守中に足引の宮を追い落とすため、更なる策略を弄する。「あさかといへるますらを」（18オ）をかたらって足引の宮の御殿に出入りさせ、不義密通をでっちあげるのである。通常本では「あさかやま（浅香山）」とあるが、本書では「あさか」とある。后たちは東善王に「有事無事へんせつを盡し、口〳〵に讒言」（19オ）する。ここまでは通常本と変わらないが、通常本では、東善王は后たちの讒言を信じず、とりあわないので、六人の武士たちを買収して足引の宮を拉致するという強硬手段に出る。しかし、本書では、

君聖王と申乍、讒者の舌の長けれは、誠に思召たるこそ情なけれ。公卿・臣下・大臣、「けに尤」といふも有、「后達のなす業ならん」と評判取〳〵なり。扨、武士六人に仰付られ、「足引の宮罪科によつて是より廿日路行て唐ひく仙の金剛か嶺尺まくの岩屋に捨玉へし」とのせんしなり。（19オ～19ウ）

とあって、東善王は后たちの讒言を聞き入れてしまう。ここも王の愚鈍さが感じられるところである。六人の武士たちに足引の宮を「唐ひく仙の金剛か嶺尺まくの岩屋」に連れて行くよう命じたのも東善王である。ただし、それはあくまで内裏からの追放であり、流罪であった。后たちはこの武士たちを買収して足引の宮殺害を命じたのである。後に足引の宮殺害を知った東善王が、「姫宮流罪なるに、死罪に誰かなしたるそ。急度沙汰すへし」（42オ）と激怒するのももっともである。

武士たちに連行される際の足引の宮の様子を、本書は、

十二壱重を身にまとひ、紅の袴の裾を取こんて、法花經半巻計讀つくし、御手に持御姿、打あけさせ玉ふ御よそほひ、十五夜の月山の端に出させ玉ふ如くなり。（20ウ）

と記す。ここでも足引の宮は法華経を読んでいる。類従本にも、

こんでいのほけきやうばんぐはんばかりあそばし。御手に持出させ給ふ御すがた。十五夜の月山のはを出させ給ふことくなり。（561頁下）

とあって、流布本系にも同様の記述が見えるが、白峰寺本には法華経への言及はない。

続いて、足引の宮が殺される場面。通常本は、類従本に「廿日ぢと申道なれども、卅日と申にはおとにきくからびく山。こんだうがみねしやくまくの岩の上につき給ふ」（562頁下）とあるように、本

来の行程よりも日数を費やして到着したとするが、本書では、「廿日の道なれとも十五日をへ、唐ひく仙金剛か嶺尺まく岩屋に着にけり」（21ウ～22オ）とあって、逆に少ない日数で目的地に着いたとする。おそらくこれは、直前にある「心ある武士、まきと申所よりあやしき駒を求め、乗せ参らせ急く程に」という記述により、徒歩ではなく馬に乗せたために速く進んだという文脈であろう。

武士が足引の宮の首を伐とうとすると、「剱さん〳〵におれたり」となる（「さん〳〵」は、類従本「だんだん」の誤写であろう）。その時、足引の宮は武士たちに、

「みつから善才王の后となり、西城国にて二年、東城国にて二年、身に唯ならぬ一天の御子懐内にやとらせ玉ふ。七月半に成ぬれは、我首はよも切まし。されとものかれぬ命なれは、暫暇乞得させよ」（22オ～22ウ）

と言って、胎内の子に語りかけ、王子を産み落とす。出産後の足引の宮の口説きと武士たちの言祝ぎは詳細で、なかなか感動的である。

そして、足引の宮は、「自も最後の置みやけせん」と言って髪を七房に結び分け、

「一ふさは善才王へ御かたみ、一房は西城国の父大王、一房は御母公、一房は王子、一房は未來のみやけ、ゑんま王へ参らする。一房は虎狼・狐・狸・猪・鹿、諸畜類にまいらする。孰も王子の生先守らせ玉へ」（25オ～25ウ）

と形見に残すのである。七房のうち六つしか献上先が書かれないが、この箇所は諸本とも異同が多く、完全な形は不明である。この後、足引の宮は詠歌し、念仏を唱え、覚悟を決めて王子の顔を見る。すると、

弥陀の利剱や太刀とかのいまつきあへぬ其内に、御首は前に落にけり。（26オ）

と、剱で突くより前に足引の宮の首は自然と前に落ちたのであった。この箇所、類従本では、「もの丶ふつるぎをぬき持て。御うしろにまはるかとおもへば。御首は水もたまらず前の岩の上にぞおちにける」（564頁上）とあり、白峰寺本では、「もの丶ふ、つるきをぬひて、御うしろにたちまはれば、御くひは、まへに、おちにけり」（465頁）とあって、ともに刃が首に当たる瞬間の描写はないが、本書では刃が当たらぬ前に首が落ちたと書かれていて、足引の宮斬殺場面の残酷さが少しだけ和らげられているように見える。

武士たちは足引の宮を殺してしまったことを後悔し、五人はその場で髻を切って出家、一人は宮の首を持ち帰って后たちに渡し、そのまま出家して修行の旅に出る。この時、善才王の母が足引の宮の首を貰い受け、西面の築山に埋めて供養する。一方、后たちは足引の宮がこの世にいなくなったことを喜び、大はしゃぎである。

善才王の母には、姫の首申請、つほに納め、此西の筑山にうつめ、經念仏おこたらす、作善供養をなし玉ふ。扨、千人の后達、足引の宮の御命を失ひ悦事限りなし。「善才王還御ならせ給はは、誰か先に御用をうけ玉ふへきにや」。我先へ人先へ、我も

〳〵とあらそひけり。とかく鬮とりにせんと暫しはなりもしつまらす。（27オ～27ウ）

とあって、千人の后たちが善才王帰国後の寵愛を期待して互いに張り合っているさまが描かれるのは、この人々が善才王の后たちであることを示唆している。しかるにその中に、父東善王の后の一人である善才王の母がいるように書かれているのは奇妙である。このあたり、物語改変の際のほころびが現れているのかも知れないと思う。

ここで、通常本には、類従本に、「扨大王へ申されけるやうは。あしびきのみやはあさか山が子をうみ給ふとて。なんざんしてしなせ給ふと申あげけり」（564頁下～565頁上）とあるように、足引の宮は浅香山の子を産んだ際、難産で亡くなったのだと后たちが東善王に偽りの報告をする記述があるが、本書にはない。本書では、王は足引の宮の死を知らないという設定になっているようだ。

さて、伽羅比丘山の王子は、母の首の切り口から出る甘露を口に含みつつ、山の守護神の加護により、畜類に世話されて育っていた。

扨、王子五歳に成玉ふ秋のころ、母上の五躰みたれ、御骨もちり〳〵になり、王子「いかゝせん」となけかれけれは、岩の硲に血しを草といふ草はへり。此草の露をふくみ玉ふは、誠にかんろのことく、なき跡までは親の育とは懸る事をや言やらん。（28ウ～29オ）

王子が五歳の時に母の五体が乱れたというのは諸本共通する。母の遺体から甘露を得られなくなった王子は嘆くが、代わりに「血しを草といふ草」が生えて、その草の露を含めば甘露のごとくであったという。通常本はこの草を「けんさう」とし、「其草をわうじきこしめして。八才まですぎたまひける」（類従本・565頁下）とあるが、本書には八歳になったという記述はない。その年の十月の初め、王子は夢に母の姿を見、「六才になり玉ふ來年の秋の比、御父善才王此山へ尋ね來り玉ふへし」（29ウ～30オ）、その時誰何されたら自らの素姓を答えよと告げられる。六歳の秋に父善才王が帰国するというのは、北条国までの行程が片道六年という本書の設定に符合している。片道十二年とする通常本には、「しからば王子十二歳と申秋のころ。とうせう国の御父ぜんざいわう此山にたづね来り給ふべし」（類従本・566頁上）とある。

母の夢告を得て後、父善才王の訪れを待つ王子の様子を描く文章は本書特有のものだが、次のように詳細かつ感動的である。

王子、御涙をおさへ、御骨を納め、御涙と共に念佛の御聲さもあわれなる御有様、諸ちくるいも感るいを流し、「さも御しゆしよう」ともいわん計りにふししつみ、御母かたちくつれ玉ひては、王子は猶も御さひしく思召、ちく類もかんかへ奉りてや、様〳〵なくさめ奉る。春は草木のはなにたわむれ、夏は谷へ下り水にあそひ、秋は木のみをひろひ手遊ひに、冬は雪・玉あられ、四季色〳〵になくさめ奉る。人倫たへたる山林なれは、御耳にふるゝものとては、深山木ふく風の音、谷水の音計にて、

又ある時は諸畜類の聲計にてそたて玉ふ。日和にまかせ谷をこへ、嶺に登り、御歩行なし、諸畜類の手足にもつれ遊玉ふそあわれなり。（30ウ～31オ）

翌年、「かくて、善才王は五年半立秋の比、北城国より薬草取帰り、宮中・万民悦事限なし」（31ウ）となる。通常本では、「十二年の秋のころ」（類従本・566頁下）のこととなっている。通常本では、帰国した善才王は持ち帰った薬草を后たちに渡すと父東善王に対面し、道中の出来事を詳しく報告する。そして、

父大わう聞しめしけるは。いまだきさきの事をばしろしめしたまはずや。かたらばやとおぼしめしけれども。余りいたはしさにとかくものは仰られず。ぜんざいわうは我が御なげきをば露ほどもしろしめされず。父大わうのいつしか十二年の間に。くろかりし御ぐししろくならせ給ふとおぼしめしかなしみ給ひて（類従本・567頁上）

云々と、父子の複雑な心中が語られるのだが、本書には父との対面場面はなく、すぐに足引の宮の御殿に向かっている。そして、荒れ果てた廃墟となったさまを見て愕然とするのである。「是はいかなる事やらん」と不審に思っていると、召し使いの腰元が一人現れる。

日比召仕の腰元壱人御前へ出申上しやうは、「君の御るすにて、千人の后達の讒言にて、姫君殿は武士の手にわたり、かくひくせんに連行、彼山にて王子御誕生、姫宮は御命を失なひ給ふとうけたまわり、王子様は御盛人遊はし候や」と、「其後いかゝの御様子うけたまり（ママ）不申」と申上ければ、善才王驚かせ給ひ、「彼山へ急ぎ、姫君・王子に訪ね逢ひ、再ひ内裏へ帰らし」。御父母へ御いとま乞もいそかしく、官人壱人も連給はす、只ひとり旅労も其儘にからひくせんへいそき玉ふ。（32オ～33オ）

腰元の話を聞いて驚いた善才王は、取る物も取りあえず伽羅比丘山に向かうのだが、なぜこの腰元が詳しい事情を知っていたのかは不明である。類従本では、

そのときとしごろつかはれ申たる女ぼう一人御前に参り。だゞ（ママ）なくより外の事はなし。ぜんざいわう扨もいかに〳〵とたづねさせ給へば。扨も君御出の後に。いくほどなくてきさきみやはむじつのとがをゆひかけて。行かたもしらずうしなひ奉ると申ければ。（567頁上～下）

とあって、足引の宮の消息についての情報はかなり曖昧であるが、この方がふさわしい。同本では、善才王はその後「ときわと申上らう」に会い、ある臣下の進言に従って「いうつげどり（告鳥）のうら」という占いを行い、足引の宮の行方について、「恋しくば西をたづねて廿日ゆけ　かばねを見てぞ子にはあふべし」（568頁上）という告げを得、そこが伽羅比丘山と知って出向くのであるが、本書では腰元から伽羅比丘山の名を聞いたため一目散に出かけて行くのである。

伽羅比丘山に着いた善才王は、金剛が嶺の麓で、老木の蔭で夜を明かすことにした。そして、そこで夢を見る。

比は七月廿七日の夜を凌玉ふ処、白装束に白袴・白絹をうちか

つきたる女、露にしほれて來りける。善才王絹引のけて御覧すれは、足引宮にておはします。（33オ～33ウ）

夢の中とは言え、感動の再会であった。足引の宮はことの経緯を詳しく語り、「泣くときうらみ、泣くときうらみな」（34ウ～35オ）く。善才王が「はや王子に尋ねあひ、二人の中にて養育し楽しみうし」（35ウ）と言うと、足引の宮は、

「さほとに思召ならは、是より南に当てかいらいこくむろとの岩屋に、不老仙人とて老翁まします。此仙人の行法にて、死たる人を祈りかへしそせいさせ給ふとうけたまはる。尋ね行頼せ玉はゝ、世にある事も有へしとあれは、しやはのおもひもはれ、修羅のくげんものかるへし。我か骨ある所王子にとはせ玉へ。おもひ置事更になし。ことはかはすも是かきり、さらは〳〵」（35ウ～36オ）

と言って、かき消すように姿を消した。翌朝、善才王は幼い声で声高く念仏を唱える声を便りに嶺に登り、王子と対面する。その時の王子の様子は、

五六歳計の童子、髪は赤く物身はこけに染、見苦敷風情にて、諸畜類の手足にまとひ、かきを手折て遊ひけり。（36ウ～37オ）

と描かれる。通常本では王子誕生後十二年のこととなっているので、

としのほと、十二三はかりなる、おさなきもの、かみは、そらさまに、おひのほり、こけむしたる、木の葉を身にまとひて、こらうやかんと、うちつれてあそふ（白峰寺本・470頁）

のように描かれる。十二、三歳では「おさなきもの」と言うには違和感があろう。そのためか、類従本では、「としのころ七ツ八ツばかりなるもの」（569頁下）と書かれているが、年月の経過との間に矛盾がある。

本書には、この対面場面にも通常本にない記事がある。まず、「善才王悦ひ、御名を改め、千王大子と名附玉ふ」（38ウ）とあり、王子に命名する。そして、

山の守護神へ御立願有。諸畜類への給ふは、「今まて王子をうやまひ介抱し、人となしたる恩報し、いつの世にか報すへし」と御手を合玉ひけり。十善天子の御身にも、子故に禮儀成給ふ。畜類とも「うるわしくゑいりよ」とや思ひけん、かんるいきもにめいし、頭をさけ尊敬するそ断なり。（38ウ～39オ）

とあって、山の守護神に願を立て、王子を養育した畜類に謝意を表している。さらに、

大子つく〳〵御物語、母上の御形ち崩れ給ひ、物淋しき折から、烏も数多飛來、親子の禮をおもんするに付て、「父恋し、母恋し」となけきしほひ、「うたゝねに母上まみへ給ひ、母御物語に父母の御名もうけたまはり、父に逢奉り、母はめいとの旅立、『母の御顔見覚す』と、『父上もろとも母の御姿見まほしくそや、みたや』と歎とも、逢見る事叶わぬは、かほとに母か縁なくは何とて腹をかし玉ふそ。是は前世のやくそくや」と、もたへこかれ泣給ふ稚心そあわれなれ。（39オ～ウ）

と、王子の心中の吐露がある。これらの記述は通常本にはない。

そして、善才王は、亡き母を恋しがって泣く王子に、夢で足引の宮が告げた蘇生法のことを語る。父子ともに足引の宮の遺骨を掘り出して「かいらい国むろとの岩屋」に行き、不老仙人に会って亡き足引の宮の蘇生を懇願する。仙人は、「六年成は四十二日祈り候はねは本の人には成かたし」（41オ）と言いつつ、蘇生の法を始める。通常本では足引の宮の死後十二年が経過しているので、仙人は「扨はかなひ候まじ」（類従本・570頁下）と拒絶するが、善才王があまりに悲しむので、蘇生までに二百日要するが、蘇生しても百三十日でまた乱れる、それでもよいかと問う。善才王がそれでも十分だと言うので、仙人は蘇生の法を始めるという展開になる。

しかし、蘇生の法を行うには大きな問題があった。肝心の首の骨がないのである。そこで、首の骨を求めて東城国へ行くのであるが、本書の記事には次のようにある。

太子宣ふは、「御首、内裏母后の元にあり」。善才王せかせ玉ひ、「肝要の首なくては御頼むなしからん。是より東城国へは遥の道、いかゝせん」とありけれは、法力自在の秘術なれは、太子を美しき鳥に乗、つはさ自在の身となし、大内へ飛行し、祖父君善王に御對面ましまして、此由語り給へは、不審成儀、孫君に御對面、「姫宮流罪なるに、死罪に誰かなしたるそ。急度沙汰すへし」と、顕らかなる御不機けん、善才王御母は足引宮の御首をほり出し、絹に包、御衣にそへ孫君に渡し玉ふ。大王御首うけ取てかこらい国に帰り給ふ。（41ウ～42オ）

十四

首は内裏の母后（善才王の母）のもとにあると王子が言う（なぜ王子がそのことを知っているのかは不明）ので、不老仙人は王子を美しい鳥に乗せた。王子は自在に飛行して内裏に行き、東善王に対面、事情を話すと、王は初めて后たちの奸計を知って激怒。善才王の母后は埋めてあった足引の宮の首を掘り出し、王子に渡す。すぐに王子は首を持ってかいらい国にとって返す。

この部分、通常本は展開がかなり大きく異なる。不老仙人は王子に剣を持たせて東城国に遣る。王子は東善王に対面して事情を話す。

其時わうじもたせ給ふつるぎをぬき。誠や千人のきさきだちは。みな〳〵おやのかたきなりとて。かのつるぎをうちふり給へば千人のきさきだちのくび一どにばらりとおちにけり。そのうち一人のくびおち給はず。是はぜんざいわうの御母なり。（類従本・571頁下）

霊剣を振ると、千人の后たちの首が一度に落ちた。ただし、善才王の母后だけは無事だった。王子は母后に事情を話し、足引の宮の骨を貰い受けるという展開である。本書では、千人の后たちはここでは死なず、後に「役人承り、千人の后達を雑人原決断所へ召出し、殺るの考門、科の軽重をたゝし、死罪・流罪・近国追放、其レ〳〵に御裁許あり。」（45オ～ウ）とあって、軽重はあるものの厳しく罰せられている。

骨が揃ったため蘇生の法は成功し、四十二日後にその験が現れ、

九月十九日午の刻に足引の宮は完全に元の姿に蘇った。「御親子三人御悦ひ限りなし」（42ウ）である。通常本では二百日かかるので、事は簡単に運ばない。待ちかねた善才王は、百九十七日目に上の絹を引き除けて見てしまうが、足引の宮はすでに元の姿になっていたという。

親子三人はしばらく不老仙人のもとで生活の手伝いをして恩を報じたが、仙人は「治世のいとなみ有へし」（43ウ）と言って三人を帰らせるにあたり、鶴亀の模様を鋳かけた秘蔵の鏡二面を取り出し、一面を足引の宮に与え、一面は南に向かって虚空に投げる。

「返ても内裏に住玉へならは、大千世界をかけ廻り、此鏡のある所住居し玉へ」。遥の国を隔て南贍部州大日本安藝の国佐西郡とうかけの里にとまりける。後には廻り逢給ふ、ふしき成ける縁なり。（43ウ～44オ）

通常本では、仙人は三本の剣を取り出し、「此けんのとゞまりたる所を御すみかとさだめ給へ」（類従本・572頁上）と言って、やはり南に向かって投げる。その剣の一本が落ちた「しやがらひ国」に三人は行き、内裏を作って住むが、善才王は、「きさきの御いもうとにおもひつき給ひて。もとのきさきの御事をつぎになし給へば。扨もきさき是をうらみ給ひて。かゝるうき世にあればこそと思召。又とぶ車にめされとび給へば。日本あきつ島いよの国いしづちのみねに初ておちつき給ふ」（類従本・572頁下）とある。ところが、「此みねにはもとはいわつかさのごんげんのすみ給ふときく。御すまひはあるまじきと有ければ。安芸のさゝいの郡かわひ村と云所におちつき給ふ」となる。そこで足引の宮は、配流の身の佐伯鞍職と出会い、彼の案内で「くろますの島」に垂迹したことが語られる。

しかし、本書では、親子三人は東城国へ帰り、善才王は父東善王から位を譲られ、王位に即く（十五歳で即位したという当初の記述とは矛盾する）。そして、仙人の后たちの処罰が行われる。次に、西城国の天一王が娘足引の宮恋しさに、妻子ともども船に乗って東城国にやって来る。足引の宮は久しぶりに父母と再会を果たす。

ところが、善才王は父母とともに渡って来た足引の宮の妹「玉井姫」と深い仲になる。それを知った足引の宮は「君にも二こゝろ。うつろひ安キ浮世や」と嘆き、「されとも兎かく此国の住居よろしからず」と思って、善才王に勧めて親子三人「うつろ舩」に乗って、不老仙人が投げた鏡を求めて出航する（47オ）。そして、「安藝の国とうかけの里」で「佐伯何かし藏元」と出会い、そこが鏡の帰着点であることを知って、その沖の島に落ち着くという展開である（47ウ～49オ）。

以下は、佐伯藏元の素姓を語り、垂迹譚や祭祀の由来などを列記して、厳島大明神の由来を詳述し、推古天皇の宣旨で終わっている。本書が、基本的な筋は変わらないものの、類従本や白峰寺本のような通常の流布本系の本とはかなり大きな本文異同があることがわか

るであろう。

三　厳島神社蔵本との関係

本書のような本文の特色を持つ伝本の存在は、実はすでに知られている。中世説話・絵巻ゼミナールによって『駒沢国文』第十七号（昭和五十五年三月）に全文翻刻されている厳島神社蔵本[9]である。同翻刻の〔付記〕に、丙類に分類される厳島神社蔵本の本文上の特徴的傾向が次のように列記されている。

(1)善哉王が姫宮を娶り連れ返（ママ）る段は他系統は略奪婚であるが、丙類本では姫宮の父王の許可を得た上での輿入れとなっている。

(2)処刑された姫宮の首は他では他の后たちに汚される処を憐れみ深い一人の后（または母后）が埋葬する。丙類本では后たち皆が首を壺に入れ筑地に埋葬する。

(3)姫宮の非法の処刑に対する報復は、他系では王子が姫宮（母）の首を取りに帰った際、その場で悪后たちを首斬る。丙類では詮議によってそれぞれの裁断を下すとする。

(4)王・王子・蘇生した姫宮が去る時、上人からの贈り物は他系では剣・飛車等だが丙類本は二面の鏡のみ、またこれを投げた行方も他系は竜宮・釈迦羅国・恩賀島等種々複数だが、丙類本は安芸国佐西郡とかけ（鳥翔）村で厳島社殿の現地にかなう（もっとも恩賀島も宮島のことであるが範囲としては大づかみである）

(5)姫宮の旅立ちは他系では善哉王に背かれた孤独・悲憤による。丙類本はそのような仲違いはなく、姫宮・王・王子共に旅立つ。

(6)佐伯蔵本が鹿を射て流罪となる話は丙類本（及び乙類刊本）にはない。

(7)その他物語の末尾部分には諸本で差が著しいが、特に丙類では清盛による社殿修造の事がきわめて簡略である。

以上の七点を列記した上で、「概して丙類本はこの物語の伝説的生々しさ（残酷・不倫）の面をやわらげて書く特色が見出される」と総括されている。

(2)を除いて本書もそのまま当てはまることが明らかである。(2)の箇所は、厳島神社本には次のようにある。

扨千人の后達は足曳の宮の御命を失い悦事限りなし。夫より御首を壺に納（ツホ）北山築地（ツイシ）の後（クシロ）に密（ヒソカ）に埋置ける時に善才王還（カエリ）御ならせ玉ふ。「誰（ドレガ）か先きに御用を受給（タマ）わるへきや。我先に、」と争（アラソ）ひける。

確かに后たちが皆で足引の宮の首を壺に入れて埋めたように書かれている。これに呼応して、王子が后の首の骨を求めて東城国へ来た時には、次のようにある。

扨夫より后達を御詮義有て隠し埋置たる首を堀出（ホリイダ）させ、母君受取玉ひ絹に包み御衣を添、孫君に渡し玉へば、大（子脱）御首を受取かいらい国へ帰り玉ふ。

后たちを詮議して隠し埋めてあった首を掘り出させたというので、先の記述と齟齬はないが、掘り出した首を「母君」が受け取って絹に包んで「孫君」に渡したというのはどういうことだろうか。善才王の母后は自分も一緒になって隠し埋めた首を受け取り、孫の王子に渡す役をつとめたというのだろうか。どうも判然としない。しかるに、本書では、首を埋める段では、先にも引いたように、

善才王の母には、姫の首申請、つほに納め、此西の筑山にうつめ、經念仏おこたらす、作善供養をなし玉ふ。扨、千人の后達、足引の宮の御命を失ひ悦事限りなし。「善才王還御ならせ給はは、誰か先に御用をうけ玉ふへきにや」。我先へ人先へ、我も〳〵とあらそひけり。とかく鬮とりにせんと暫しはなりもしつまらす。（27オ～ウ）

とあって、善才王の母が足引の宮の首を貰い受けて壺に納めて築山に埋め、丁重に供養している。それをよそに后たちは足引の宮を亡き者にしたことを喜んで大はしゃぎなのである。そして、王子に首を求められた際には、

善才王御母は足引宮の御首をほり出し、絹に包、御衣にそへ孫君に渡し玉ふ。（42オ）

と、自らが埋めた首を自分で掘り出して孫君に渡すのである。こちらは極めて明解である。おそらく、本書のような形が本来なのだが、厳島神社本は転写の過程で何らかの錯誤が生じたのではないかと考えられる。

本書と厳島神社本の本文は極めて近い関係にあることが明らかではあるが、相違点も散見する。顕著な例をいくつか挙げてみる。○印が本書、→の下が厳島神社本の本文である。

○《増鏡かけみるからにあこかれて我身は空に成ぬへきかな》（7オ～ウ）

→ます鏡また見ぬ君の情こそ前世よりのえんになるらん

○一ふさは善才王へ御かたみ、一房は西城国の父大王、一房は御母公、一房は王子、一房は未來のみやけ、ゑんま王へ参らする。一房は虎狼・狐・狸・猪・鹿、諸畜類にまいらする。（25オ～ウ）

→一房善才王へ参らせん。一房は王子に参らせん。一房は西城国の御父大王へ参らせん。一房は此山の守護神へ参らせん。一房は虎狼野干猪鹿もろ〳〵の畜類へ参らせん。

○《孤し子にたつる山の龍田姫秋の木葉もあらくちらすな》

→みなし子の人となるへき情をは岩木ならさる畜類も知れ

○日比召仕の腰元壱人御前へ出申上しやうは（32オ～ウ）

→日比召仕われし臣壱人御前へ参り申けるは

○安（マヽ）ゝの外なる内裏の大変、賤の女が知らせによつて（35オ）

→案の外なる内裡の大変賤の男がしらせに依て

○うつろ舩に飛のり（47オ）

→うつぼ船に飛乗り

○推古天皇の御宇、ちよくがんあれは、御代〳〵御尊敬浅からす。（51ウ）

↓ナシ

他にも、本書にあって厳島神社本になく、厳島神社本の脱落ではないかと疑われる異同や、逆に本書の脱落かと見られる箇所を厳島神社本で補うことができる相違もそれぞれ何箇所かあるが、紙数の都合で割愛する。最後に記しておくべき大きな相違は末尾にある。本書は端正五年十一月廿三日付けの「推古天皇御感状」で終わっているのに対し、厳島神社本は、その後に「当大明神御託宮（宣カ）」が続いて終わっている。厳島神社本の増補であろうか。

おわりに

以上長々と述べたごとく、本書は松本隆信氏の分類によるD系統に属する新出本として、すでに知られている厳島神社本とそれぞれの欠を補い合いながらも、独自の個性を発揮している伝本と言うことができる。全文を翻刻して紹介する意義なしとしないものである。

厳島神社本と同系統の本文を持つ本として、宮島歴史民俗資料館所蔵の木下家寄託本の存在も知られており、両本間の本文異同も一部紹介されている。今後、調査の機会が得られれば木下本の本文と本書および厳島神社本との関係について検討を加えてみたいと思う。

〔注〕

（1）松本隆信氏「厳島の本地」『中世における本地物の研究』（一九九六年　汲古書院）所収。

（2）中世説話・絵巻ゼミナール「翻刻 いつくしま本地（慶応義塾図書館蔵）」『駒沢国文』第十五号（昭和五十三年三月）。

（3）白石一美氏「異本厳島の御本地『宮島由来記』の性格―貞和・元和両本混淆本か―」『宮崎大学教育学部紀要』第三十六号（昭和四十九年九月）。

（4）松本隆信氏「増訂 室町時代物語類現存本簡明目録」『御伽草子の世界』（奈良絵本国際研究会編、一九八二年　三省堂）所収。

（5）山手賢太郎氏「「厳島縁起」諸本考（一）―甲系統諸本の種別分類―」『うずしお文藻』第十六号（平成十三年三月　四国大学文学部国文学研究室。以下、山手氏の説はすべて同論文による。

（6）本書本文の引用は、拙稿「翻刻『厳嶋御縁記』（架蔵Ｃ本）」『厳島研究』第十二号（平成二十八年三月）による。以下同じ。

（7）類従本本文の引用は、『続群書類従』第参輯下（昭和七年　続群書類従完成会）による。以下同じ。

（8）白峰寺本本文の引用は、『厳島信仰事典』（二〇〇二年　戎光祥出版）所収「〈翻刻・現代語訳〉いつくしま」による。以下同じ。

（9）中世説話・絵巻ゼミナール「翻刻 厳島御縁記（厳島神社蔵）」『駒沢国文』第十七号（昭和五十五年三月）。厳島神社本本文の引用はすべて同翻刻による。

On the Text of *History of Itsukushima* (Shelf C Manuscript)

Reading the Manuscript as a Text Syncretic with the Itsukushima Shrine Archives Manuscripts

Yoshinobu SENO

This is a textual examination of a manuscript in the author's possession titled *History of Itsukushima* [*Itsukushima Goengi*]. It is a distinctive volume, its text varying considerably from standard manuscripts of the general title *History of Itsukushima* [*Itsukushima Engi*], which recount the origin of the Itsukushima Shrine. Through a close reading of texts of relevant manuscripts, this article will both clarify the distinctiveness of this manuscript while also demonstrating how it belongs to the same category and bears a similar textuality as the manuscripts housed in the Itsukushima Shrine archives.